別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　藤岡 俊博

藤岡俊博氏の論文「エマニュエル・レヴィナスと「場所」の倫理」は、「場所」の概念を読解の中心に据え、リトアニア出身のユダヤ系フランス人哲学者エマニュエル・レヴィナス（1906－1995）の「倫理」を、「場所」を縦糸として時系列的に分析し、その生成と構造を明らかにしたものである。

本論文は、序論、第Ⅰ部～第Ⅴ部、結論から構成される。

第Ⅰ部「具体性の諸相」は、1930 年代の論考を取り上げ、フッサール、ハイデガーのもとで現象学者として出発したレヴィナスが、現象学の試みている具体的な生の分析をどのように評価していたかを分析する。というのも彼は、人間の生を豊かな具体性のもとに記述するとして基本的に現象学を評価するが、他方で具体的生への繋縛に対する警戒も語っているからである。後者は、「ヒトラー主義に関する若干の考察」（1934 年）、存在からの超脱を考察する「逃走について」（1935 年）に読むことができる。こうして本論文は、冒頭から、世界への内在／世界からの超脱という、レヴィナスが生涯持ち続ける姿勢の両面を提示する。さらに、哲学的論考と同時代のユダヤ教論考を取り上げ、両者の密接な連関を探求する。本論文の大きな特色となっているこの姿勢から、この時代のレヴィナスにとって、反ユダヤ主義は「異教」の復活と結びついているという点、生の具体性から脱却する可能性がユダヤ教のうちに見いだされているという点が明らかになる。

第Ⅰ部をふまえて、第Ⅱ部「環境世界と根源的場所」は、初期の主要著作であり、「場所」が最も明示的に語られている『実存から実存者へ』（1947 年）を検討の対象とする。そのために不可欠な作業として、藤岡氏は、ハイデガーにおける日常性とレヴィナスにおける日常世界を対比的に考察し、緻密かつ明快な仕方で、「道具と趣向性」の世界に対する「糧と欲望」の世界という構図を描き出してゆく。さらに、レヴィナス独特の概念である、一切の存在者に先立つ存在としての il y a（ある）の主題化、その il y a からの脱出によって根源的な場所としての「ここ」を所有するにいたる過程が示され、本論文が扱おうとする領野が読者の眼前に広がることになる。民族学者レヴィ=ブリュールの「未開」の心性、先行研究でほとんど言及されたことのない地理学者エリック・ダルデルの「現象学的地理学」の有効活用などは、執筆者がいかに細心に議論を組み立てたかを証言している。

第 III 部「居住と彷徨」では、1950 年代から主著『全体性と無限』（1961 年）にいたるまでの思想の動きが、1）存在論の根源性に対する批判、2）ハイデガーの「居住」の思想に対する批判、3）校訂版全集『フッセリアーナ』を契機とするフッサールの再解釈の三点に注目して語

られる。ただし、とりわけ『全体性と無限』第 2 部「内部性と家政」からは、レヴィナスがハイデガーの思想を単に否定したのではなく、それを組み替えながら吸収していったことがうかがわれ、生・享受・身体・元基・感受性・家・所有・労働など、固有の意味が装填された諸概念もその観点から読まれるべきだとされる。また本論文は、「他者の思想家」として紹介されるレヴィナスの出発点が他者論ではなくあくまで自我論であることを強調する。《同》という内部性の外延が問われた上でのみ、内部性を超越したものとして他者が立てられるのである。その動きを象徴的に示す「ハイデガー、ガガーリン、われわれ」（1961 年）の分析から、技術の力と土地の精霊という対比が導入され、後者に価値を認めるハイデガーの「居住」を、レヴィナスが「場所」への「異教」的な根づきと批判的に位置づけていること、異教・無神論・一神教という三層構造が『全体性と無限』の理論的体系の下地をなしていることが示される。

1970 年代の中心的著作『存在するとは別の仕方で』を論じる第 IV 部「非場所の倫理」では、「場所論的転回」という大胆な読解が提示される。思想の連続性ゆえの「転回」というこの読解は、レヴィナス解釈に新たな可能性を加えるものといっても過言ではない。「転回」は、「痕跡」・「近さ」といった概念の導入、「他者のための責任」と不可分な「身代わり」の記号論、聖書表現「われここに」という応答の重要性、他者の呼びかけへの応答によって成立する「非場所」的主体などを通じて論じられる。レヴィナス自身は、「非場所」を明確に定式化したわけではない。しかし藤岡氏は、パウル・ツェランやエドモン・ジャベスといったユダヤ系詩人、あるいは精神病理学をめぐる論考を通じて、レヴィナスがそれらに付託して語る「非場所」の相貌を示そうとする。

第 IV 部は、哲学著作の時系列的な読解から現れる「非場所の倫理」の総括であった。第 V 部「レヴィナスとイスラエル」は、ユダヤ教論考をとりあげ、「場所」・「非場所」の主題と「約束の地」およびイスラエル国家という複雑によじれた問題を、レヴィナスの伝記的事実、イスラエル国家と「離散（ディアスポラ）」との緊張関係、1960 年代から 1970 年代の政治的・社会的背景を交えながら論じる。タルムード講話「約束された地か許された地か」（1965 年）、「空間は一次元ではない」（1968 年）からは、「約束の地」の所有は普遍的な「正義」の名においてのみ正当化されるという思想が読み取れる。その半面、『存在するとは別の仕方で』で語られる、「責任」を軽減する「正義」が「非場所」を共通の「場所」へと開くことが示され、「約束の地」における正義は、場所／非場所の微妙な二重性の上に、または相矛盾する倫理的要請と政治的要請とが拮抗する上にあるものと位置づけられる。レヴィナスは、「高さ」概念によって両者の調停を試みようとする。その結果「場所かつ非場所」というユートピア的両立が、レヴィナス的主体性とイスラエルの双方に共通する構造として現れるのである。

エマニュエル・レヴィナスは、とりわけ 1980 年代以来、日本を含む世界各地で盛んに研究されている重要な思想家である。しかし「場所」を主題とした本格的な研究は知られていない。したがって「場所」を導きの糸にして「他者」や「倫理」といった、レヴィナス特有の大概念に挑む姿勢には優れた独創性を認めることができ、さらにその視点から思想の連続性と整合性を描き

出すのに成功したことは、今後のレヴィナス研究全般に貢献するものとして大いに喜びとしたい。審査員のひとりから紹介された、藤岡氏によるフランス語での研究成果が第一線で活躍する複数のフランス人研究者からも高く評価されているという点も、十分に納得がゆくものである。

本論文の長所は独創性のみではない。周到な資料調査、緻密な論理構成による記述はきわめて堅牢であり、対象となるテクストを捌く手際のよさ、必要な引用をかならず提示する配慮などのおかげで、高度な内容にもかかわらず読み進むことは驚くほど容易であった。また、性急な断定を避け、忍耐強くレヴィナス思想の内的構造を追究していった点も異口同音に評価された。その姿勢は、仮想的な論敵としていったんは退けられるかに見えるフッサールやハイデガー相手に、レヴィナスがその後も対話を続け、自分の思想に組み込んでいった身振りへ注意をむけることを可能にしている。レヴィ=ブリュール、ダルデル、ツェラン、ジャベス等を論じるレヴィナスに関する詳しい記述をおこないえたのもその姿勢ゆえであり、新たな視点の獲得につながっている。

レヴィナスについては、哲学的もしくは倫理的著作とタルムード読解などのユダヤ教関連の著作が切り離して論じられがちである。しかし本論文は、初めから双方の本質的な関連を認めている。その姿勢こそが、レヴィナスのイスラエル国家に対する視点を単に政治的にではなく哲学的に分析することを可能にしている。著者自身「第 V 部は、レヴィナスの思想を構成する哲学著作とユダヤ教論考という二つの次元を「場所」の主題を軸に架橋する試みでもある」と述べているが、その意図と成果を積極的に評価したい。内的読解を主軸とした本論文に、非常に効果的なかたちでレヴィナスの伝記的事実、フランスとイスラエルをめぐる政治的、社会的背景が挿入される点も、本論文の出色の出来に貢献している。

なお、とりわけ第Ｖ部においてレヴィナス思想の諸矛盾が論じられるが、断定を避ける本論文は思想全体の是非を問うことはしない。思想が軋みだす行程をたどり、その軋みの手前で立ち止まるその身振りは、ギリシャ - 西洋／ユダヤの両プレート上に立ちながら後者を顕揚しようとするレヴィナスに対してジャック・デリダの「暴力と形而上学」（1964 年）が展開する批判の出発点付近まで、まったく別の道を通って読者を導くと言えるかもしれない。

他方でいくつかの問題も指摘された。1）ハイデガーの存在論を権力の哲学と位置づけるレヴィナスの見方からもう少し離れることはできなかったのか。2）レヴィナスにとって「ユダヤ人」とは誰かが十分に説明されていないのではないか。3）レヴィナスが語る具体性は、とりわけ人類学などから見た場合、具体的と言えないのではないか。4）場所の議論を父性、血、女性的なもの、エロスの現象学、家族といった方面から立ち上げることもできるのではないか。5）「非場所の倫理」は「ユダヤ民族」という「場所」を想定してしまうと破綻に瀕するのではないか。

しかし、これらのなかには、今後の課題とされているものもあり、論文に対してというよりもレヴィナス思想そのものに向けられたものもある。したがって、研究自体の価値を減ずるものではない。よって審査委員会は、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。